

『写真による 原爆災害記録』(仮題)出版企画書

仁科記念財団

◇ 出版の趣旨

映画「原子爆弾の効果」は、もともと故仁科先生の指導・援助によつて完成されたものであるが、昨年アメリカ当局から日本側に引き渡され、テレビその他で公開されて全国的な反響をよんだ。これを機会に記録写真を中心として、この映画を紙上に再構成して、一つの歴史的記録として後世に残したいという声は、仁科記念財団関係者のみでなく、ひろく各方面からよせられている。

今回の出版企画は、この要請に答えるもので、もちろん、海外の読者も考慮に入れるものである。

〔参考〕 原爆映画と故仁科博士

「原爆映画」の製作が日本映画社で着手されることになつた発端は、日本映画社から仁科先生に相談があり、先生の指導を得て科学的記録映画の方針が立てられたことにはじまる。そして、原爆災害調査団の映画班として現地撮影を進

めた。十月中旬長崎で米軍側から撮影中止命令をうけ、同時に學術調査の公的な活動も中止された。

この中止の時点で、活動が中断したのは、映画としては計画の²/₃、學術調査は日米合同調査団の組織中に記載されていた医学班を除く他の全調査であった。それから十二月中旬までの二ヶ月間、仁科先生は殆んど連日、米軍関係者と連絡して調査と撮影の再開をはかれたが、映画はついに没収された。そのままでは、映画は破棄散逸してしまふから、上映できる作品にまとめておきたいという日映側の提案により、米軍側の監督のもとで、長崎の再撮影と、これに並行する放射能分布測定が広島、長崎で行なわれた。

米軍側は、完成をいそぎ日限をきめていたが、仁科先生は、學術記録映画はただフィルムをつなぎ、説明をつければよいというものではないことを主張し、それを了解させるための労をとられた。しかし結果としては、仕方がないから簡単しておくのだなと、半ばあきらめておられた。

翌年五月、映画はできた。日比谷での公式試写会には仁科先生の出席は断られた。(日本側は製作担当者一名のみ)

「原爆映画」はこのようにして、あらゆるフィルム一切が米国へもち去られた。

「原爆映画」の返還交渉をはじめから七年、映画は16ミリフィルムで戻つて来た。そのプリント状態は良好でなく、資料としても満足できるものではない。またこれを、学術資料として見ると、当時の変則的状況下でつくられたこの映画が正しく理解されるためには、補助資料作成の必要が生れた。この点は、故嵯峨根博士が企画案（メモ）を用意されたとおりである。

ところで、幸いなことに、当時映画撮影に同行した写真家の記録写真が約、二、〇〇〇枚、保存されている。それに被爆直後、軍属写真家などの撮影したもの、調査団のメンバーが撮影したものなどを加えると、約三、〇〇〇枚の写真がある。これらの写真は、一部分はすでに公表されているが、体系的に整理された写真記録としては発表されていない。

これらの写真資料を中心に、原爆災害の調査研究の経過と内容を編纂すると、多少の補足解説をつければ、一応、各学術分野にふれることができる。そして、仁科先生が、映画班に指示された企画案が、広島・長崎の被災地撮影

で、いかに具体化され、どのように表現されたかを、当初の意図にもとづいて理解できると思われる。

◇ 出版の要綱

○ 題 名 「写真による原爆災害記録」(仮題)

○ 編 纂 仁科記念財団

○ 編集委員(順不同)

山崎文男	(日本原子力研究所理事)
田島英三	(立教大学理学部教授)
中山弘美	(科研化学株式会社常務取締役)
宮崎友喜雄	(理化学研究所主任研究員)

玉 木 英 彦 (東大教授)
 浜 田 達 二 (理化学研究所主任研究員)
 篠 原 健 一 (早稲田大学理工学研究所教授)
 中 根 良 平 (理化学研究所主任研究員)
 三 宅 仁 (東大医学部名誉教授 広島ABC副所長)
 調 来 助 (長崎大学医学部名誉教授)
 重 藤 文 夫 (広島原爆病院院長)
 服 部 達 太 郎 (横浜日赤病院院長)
 加 納 龍 一 (原爆映画のプロデューサー)
 相 原 秀 次 ()

なお、各項執筆者および専門事項の校閲は、右委員の発議による。

○ 出版・発行 光風社書店 (担当 豊島 徹)

○ 版型 A4版 上製函入、約三五〇頁

○ 写真

原色版

二枚

グラビヤ写真図版

八〇頁

本文中写真

約三〇〇枚

地図、参考図版

若干

原稿（四〇〇字詰）

四〇〇枚

○ 発行予定

十一月上旬

○ 発行部数

初版 三、〇〇〇部（予価、五、〇〇〇円）

○ 内容見本

（八一十頁）九月下旬頒布

◇ 本書の内容 目次（概略）

図版 原爆災害の特徴

被爆当初より學術調査にわたる期間に撮影された写真のうちから、その特徴を示すものを選んで約八十頁に構成する。

本文

序文 朝永振一郎

凡例 本書の成立および構成について 山崎文男

1 発端

- a 原爆投下の観測とその日の広島・長崎
 - b 原爆投下による広島・長崎の氣象変化
 - c 被災者の観察した原爆現象
 - d 初期の救護医療活動 概観
 - e 初期の災害調査活動
- 附 原爆投下より終戦にいたる経過

2 原子爆弾の判決

a 新型特殊爆弾は原子爆弾である

Ⅰ 科学者の動員・仁科博士現地へ

b 原子爆弾と決定された会議とその調査の原資料

c はじめて紹介された原子爆弾の解説

附 「原子爆弾」仁科芳雄 (「世界」掲載)

d 総括 原爆災害に対処した科学者

3 医学的にみた当時の経過

a 救護活動における現地の医療実績

(広島) 暁部隊、通信病院、日赤、その他

(長崎) 針尾救護隊、大村、諫早海軍病院、

その他(新しく発見された資料を含む)

b 陸軍軍医学校の調査

Ⅰ 最初の報告書出版にいたる経過

c 京大・九大その他の調査

4 原爆災害調査活動など

a 学術会議特別調査団の発足

1 映画撮影隊の参加

b 日米合同調査団の結成

5 原爆災害記録映画の採録

a その製作経過

1 着手にあたって何が配慮されたか

1 仁科博士の構想

b 原爆災害記録映画の学術上の補足

6 原爆災害記録映画撮影以後の問題

a 医学上の問題

b 物理学上の問題

7 座談会

a 当時の災害調査研究を今日の時点よりみて

b 映画製作をかえりみて

c 二次放射能、線量、遺伝、A B C C その他

内 容 見 本

版 型 A 4 版（本と同じ大きさ）八―十頁
写 真 七、八葉
部 数 二万部

発刊のことば 朝 永 振 一 郎

編集関係者の
ことば 山 崎 文 男
田 島 英 三
三 宅 仁
重 藤 文 夫
加 納 龍 一

推薦者のことば

（五十音順）

大江 健三郎
大 仙 次郎
茅 誠 司
木村 伊兵衛
H・C・ケリ
坂 西 志 保
武 見 太 郎
田 中 慎 次 郎
松 永 安左衛門
武 藤 俊之助